

民俗博物館だより

Vol. IV No. 4

1978. 2. 5



御田植祭 (村屋坐弥富都比売神社)

目 次

考古学と民俗学の接点	1
御田植祭 (大和の民俗行事)	3
トチ・カシ・ホソの実の採集・調製用具	4
大和緋の文様と技法(フィールドノート)	6
博物館事業報告	10
寄贈民俗資料分類目録	13
寄贈図書資料目録・おしらせ他	15

考古学と民俗学の接点

平安博物館助教授

渡 辺 誠

I 縄文時代の考古学を研究する立場から、民俗学的資料を利用する必要に迫られ、近年はそれに飽きたらず、素人の強味で民俗調査を手がけることになってきた。そのきっかけは、いわゆるドングリ類への関心であった。

縄文時代の食料資源として、トチの実などの堅果類とともに、ドングリ類もまたきわめて重要であった。このドングリ類は、「食べると啞になる」といった話があるように、渋味（アク）をとらないと食べられない種類が多い。このアクをどのようにとり去り、どのように食べたか、またこれらに伴ってどんな道具や施設が必要かといったことを、民俗資料から知りたいと思った。これらが明らかになると、縄文時代の理解がかなり進むものと期待された。

ところが民俗調査の報告書をひもとくと、期待はずれもはなはだしい。幸い奈良県下のみは例外で、林宏先生のような秀れた先達のおかげで、記載は具体的である。他の多くはなにが具体的でないかといえば、かつてはドングリを食べていたと記されているのみで、どんな種類のドングリを、どんな風にアク抜きをしたかなどは調べられていない。または逆に食べ方が記されていても、種類が書かれていないことが多い。その上言外に、いかに貧しかったかということをおわせ、まったく不用な調査者の優越感がうかがわれる場合さえある。

II ドングリ類は、次の4群に大別される。A類は、ブナ科コナラ属コナラ亜属のクスギ・アベマキなどで、まんまるである。「ドングリまなこ」のドングリはこれらである。アクが強く加工が手間なのであろうか、もはやどのように加工したかの伝承は途絶えている。

B類は、同じコナラ亜属のミズナラ・コナラなどのナラ類である。コナラは、奈良県下はじめ多くのところでは、ハウソとよばれることが多い。これらはなんべんもくりかえし水から炊いて、あずき色の水が出なくなったら、水にさらして食べる。

C類は、ブナ科コナラ属アカガシ亜属のアカシ・シラカシ・ウラジロガシなどのカシ類である。これらは荒割りまたは製粉した状態で、なん日も冬の冷たい水にさらしてアク抜きをすることが多い（写真参照）。

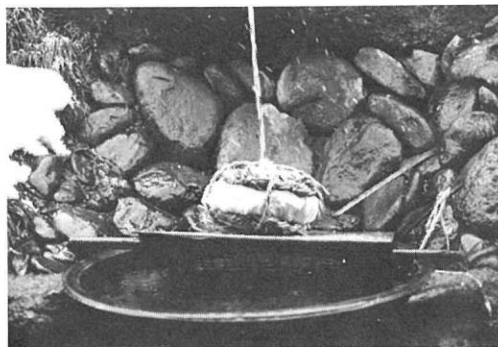
D類は、以上と異なりアク抜きがいらず、そのまま生や、焼いたりして食べられるものである。ブナ科シイノキ属のスダジイ・ツブラジイ、同マテバシイ属マテバシイなどのシイ類、それにカシ類中のイチイガシのみが、例外的に本類にはいる。

A・B類は、主として東日本の落葉樹林帯、C・D類は、主として西日本の照葉樹林帯に分布し、各ゾーンの指標的な樹種である。奈良県でも低山帯にはシイ・カシ類が多く、山地帯にはナラ類が多くなる。

アク抜きを必要としないシイ類を除けば、ナラ類(B)とカシ類(C)は主分布域を異にするばかりでなく、その加工方法も異にしている。多くの民俗調査報告が使用に耐えない大きな原因は、ここにある。どの種類のドングリ類か明示しなければ、実際問題食べられるわけがない。

これにくらべれば、江戸時代の救荒食料の書物は正確である。ナラの食べ方、カシの食べ方と、個別具体的に記されている。

III 縄文時代の中期（今から約5000年前）になると、ドングリ類をたくわえた貯蔵穴や、むかれた皮が層をなして発掘される例が多くなる。アク抜きを必要としないシイ類は、そ



ジザイ(カシ)の実の寒ざらし(京都府舞鶴市大俣町)

れより前から食べられていたであろうが、この頃からアク抜き技術を習得して、いろいろな種類のドングリも食べられるようになったらしい。これらは天日でよく乾燥すれば、長期保存も可能であり、さらにトチの実のむずかしいアク抜きも習得し、生活が相対的に安定するようになった。そしてその集落は、必ずコンコンと清水の湧く自然湧水点の脇に営まれている。

ドングリ類のアクは、タンニンである。柿の渋もタンニンであるが、渋柿が甘柿に変じるように、このタンニンは複雑な性質をもった成分である。その含有率は、ナラ類よりカシ類の方が低い。加工方法では、カシ類は水さらしのみ、ナラ類はこれに加えて加熱工程が重要な役割をもっている。加熱の有無と含有率は一見対比しているが、事実はそうでもないらしい。もし含有率のみで単純に割り切れるのであれば、カシ類についても加熱処理をして、所要日数を短縮すればよさそうであるが、決してそんなことをする人がいないことは、民衆の知恵として重視されることである。

このような未解明の問題を含んでいるが、いずれにしろ種類ごとに正確な加工方法を縄文中期人が習得し、それが連綿として、ごく最近まで伝わっていたのである。

この種類ごとの加工技術こそ、民俗調査にもっとも期待したいことである。いわば生態学的条件の調査であるが、これはどんなに時間が離れても普遍的な条件である。もしアクの量・質が異なれば、植物としては種が変わることになるのだから。

Ⅶ 私の個人的体験では、民俗調査は残存文化の調査といった面は少し後退させ、条件調査といった姿勢を積極的に導入すべきであろうと思う。その条件は、上記の生態学的条件に加えて、社会的条件と技術的条件が重要である。

社会的条件をカシ類のドングリに例をとれば、同じアラカシ・シラカシを水さらしでアク抜きする2地域で、その期間がまったく異なる場合がある。奈良県南部では数日でよいとするが、京都府北部では20～30日を必要とする。この原因は、前者ではカシメシなどとしてコメに混ぜられるが、後者ではジザイモ

チとして、それのみで単独で食べるからである。食習俗としての社会的条件の差が反映しているのである。これはコメ作以前と以後の、時代差へ置き換えることもできよう。

Ⅴ 京都府北部の由良川下流域では、カシの実をジザイの実とよぶ。シイはシイであるがコナラはハウソで、クヌギはタンコロジザイとよび、ドングリ類の4群は、完全に個別に識別され、ドングリ類といった総称概念すらなかったのである。その上ドングリという言葉は、国定教科書と「ドングリコロコロ」の歌とともにはいってきたものであることすら、記憶されている。

これらを重要な食料として考えなくてもよい時代になり、ドングリといった言葉が総称概念として広まったとみることができる。そして現代では、その加工方法を知っているお年寄りに会うことすら、むずかしくなっている。

ドングリを食べなくなり、食糧状態が向上すること自体は歓迎されるべきことであり、庶民の願いでもあった。しかし近年の食糧状態は高度成長の悪影響下にあり、いわば強制された向上であり、かつて種類ごとにドングリ類を加工していたような、正しい自然認識は急速に失われつつある。ドングリを実らせている樹木は、他に建築・家具・農具・舟・炭の材料として、多種多様の用途をもっている。食料もその一半を占めているにすぎない。これらに対する正しい知識は、正しい判断力の基礎として、決して失なわれてよいものではない。

民俗資料中特に民具から引き出すべき情報には、その形態・機能ばかりでなく、樹種の選定基準の認識形態をも含ませるべきである。このためには民具をまず保存し、いずれ後日いろいろ考えるということでは、目の前の消えかかっている火を、みずから消すことになってしまう。

植物学的知識の欠如は、民俗学・民具学研究者の欠点である。これがはじめに記した種類の記載を不可能にした本当の原因である。しかしこれでは考古学には利用できないばかりでなく、後世に伝えるべき民俗知識の体系に、大きなかたよりを生じることになるであろう。

御 田 植 祭

大宮守人

年頭には1年の福を願う儀礼がいくつも
あるが、稲作農耕によって育まれた日本文化
であってみれば、どの行事も農耕儀礼に結び
つくものと考えられる。

村の境界に新しい綱を掛けるカンジョウカ
ケ、家の門口に松などの木を立てるカドマツ
タテ、などは農村をはなれた都市生活の中
でもいろいろと変化はしているが、正月の象
徴となっている。

ところで、年頭の農耕儀礼の中にオンダ
という重要な予祝行事がある。

春日大社、三輪明神、石上神社、などの大
社の他、奈良盆地を中心として、周辺部の村
々にまで数多くのオンダが、今も毎年続けら
れている。時期は、1月から4月頃までの間
で、各所まちまちであるが、旧暦と新暦の交
替による影響を考えると、年頭という範ちゅう
に入ると思われる。

この行事の特色は、神前での模擬的な所作
にある。苗代ごしらえから、播種、田ごしら
え、田植に至る農耕の所作を演じて、斯くの
如くに順調な稲の生育が得られるように、ま
た天候に恵まれるようにとの祈願を具体的に
表現したものだとなっている。

河合町の広瀬神社や、田原本の鏡作神社の
オンダでは、群衆が最後に砂をかけ合って暴
れるが、この砂を雨に見たて、よく暴れるほ
ど、水に恵まれ豊作だという説明が聞かれる。

また、農耕の所作に登場する、村の青年が
扮した牛を、子供達が足で蹴ったり、からか



御田植祭 (村屋坐弥富都比売神社)

ったりするのに対し、牛が大いに暴れるほど
良いという。牛の健康も神に祈願する所作で
あるのかも知れない。

この他、飛鳥坐神社では、夫婦和合の所作
が、川西町保田の六県神社では子供が生れる
所作、大宇陀町野依のオンダでは、ショトメ
サン(娘に扮して農作の所作をする村人達)
の陰部を見物の子供が、こぞって覗むという
事がある。

稲の豊作だけではなく、村の担手たる人間
の基本的な条件に対しても福が得られるよう
にとの祈りの所作であろうか。

これらの模擬的な所作は、巧まざる滑稽味
があり、行事の進行と共にその所作に、つい
見入って顔もほころぶという趣がある。

つまり、見せる芸能の原初的な条件もそこ
にあり、誰にでも感じる事のできるおもしろ
さが、この行事にはある。

そこに数ある農耕儀礼の中でも特別の雰
囲気を見る事が出来る。

田楽や猿楽・能楽は祭りの場で育まれたも
のが、芸能として独立して今日に至っている
といわれる。

オンダに見られる芸能的要素は直接これら
中世芸能に結びつくものかは不明であるが、
祭りの担手であり、村の担手である人々によ
って神に対して演じられる農耕の所作は、
神祭りと芸能が未だ未分化の時代を想像させ
るのである。

県内では飛鳥のオンダが特に有名になっ
ているが、各地に思いのほか多くのオンダが
残っている。

これは、やはり農耕生活の基本というもの
はそう簡単に変わり得るものでもなく、依然
として天候に大きく左右されるという事実が、
農村にこうした行事を長く伝えて来た大きな
要素だと考えられるだろう。

尚、当館ではオンダも含む農耕儀礼をテー
マとした、マルチオートスライドを製作して
いるが、それも三月には公開出来る予定であ
る。御期待いただきたい。

収蔵資料の紹介(12)

トチ・カシ・ホソの実の採集・調製用具 浦西 勉

先に『民俗博物館紀要・第1号』にトチ・カシ・ホソの実のアクスキを中心とした報告をしたが、用具についてはあまり触れ得なかったので、その欠を補う意味からこれらの木の実の調製用具について報告してみたい。

■トチの調製用具■トチの実はトチモチか粉にしてからダンゴをこしらえて食べたもので今日上北山村、下北山村、十津川村などで伝えている。その調製用具を、トチモチのできるまでにそって説明してみる。

①採集②虫を殺す(水中に入れる)③干す・保存④温めてから外殻を割る⑤灰のアク汁の中へトチをつける⑥水にさらす⑦再び灰のアク汁の中へつける⑧モチゴメとセイロで蒸す⑨ウスで餅を搗きトチモチをつくる。

以上がトチモチのできるまでを順次記したものである。この①～⑨までに使用される用具を記すと次の通りである。①トチ採集袋・ドンゴロス・腰カゴ ②オケ ③ムシロ ④トチオシ・ツチ・オケ・ナタ、⑤ウラジロ・一斗カン・布・オケ・ハチ・灰・ザル、⑥袋⑦一斗カン・布・オケ・灰、⑧セイロ、⑨ウス・キネなどである。このトチの調製用具はさして変化のあるものではないが、あえてあげれば、トチの殻を割る用具と灰汁をつくるための用具にあると言える。トチの殻を割るにはトチオシ(土地によってトチシャギ、トチヘギとよぶ)という、2枚板を合せたものを使用する(写真参照)。また灰のアク汁を作る時一斗カンに穴をあけ、布を敷いて灰

をのせ湯をかけるのであるが、十津川村下葛川、同村滝川のように、ザルにウラジロを敷いて、灰のアク汁をとるところもある。

■カシの調整用具■カシ(オオカシ)は北山村や十津川村葛川地方で、カシの粉として食された。今日ごくわずかであるがそのカシの粉を作っているところが残っている(上北山村西原)。カシの粉を作るには次の順による。

①採集 ②カシの皮をはがす、③干す、④箕であおって実のみのこす、⑤粉にする、⑥アクをぬく、⑦干す、⑧カシメシ、以上がカシを粉にしてカシメシとして食するまでの調製工程であるが、その順にそって用具を記してゆく。①袋・腰カゴ、②カシタタキ台・カシタタキツチ・ハンギリ、③ムシロ、④箕、⑤カラウス、⑥袋・オケ、などを使用している。ここでもさほど特徴のある用具は使用されているとは言えないが、カシ用の外殻をとるツチや台などの名称から、トチ同様にこの作業が苦心であったことが知れる。

■ホソの調製用具■ホソの実は、ナラの実のことで、吉野郡ではホソといったほうが通りが良い。これは、ホソバツタイ、ホソダンゴなどにして、天川村、野迫川村で食べた。天川村南日裏のホソバツタイのできるまでを順をおって記す。

①採集、②外殻を割る、③鍋にて炊く(7・8回)④干す、⑤粉にする(ホソバツタイ)以上がその工程である。③の鍋で何回もホソを炊くことが、アクスキ方法である。このホソ



採集カゴ(十津川村旭)



採集袋(上北山村西原)

カシタタキツチとカシタタキ台
(上北山村西原)

の実の調製用具は、①袋・ドンゴロス・腰カゴ、②ムシロ・ツチ・石の台、③ムシロ、④カラウス・石臼、などが使用されている。ホソの専用道具が少ないのは、そう沢山食されてなかったとことによるものと考えられる。

以上3種の木の実の調製用具をみてきたがその特徴といえは、トチの実のトチオシ、カシの実のカシタタキ台、カシタタキツチなどの外殻をとる用具ぐらいで、他は代用で工夫されていると言えるかと思う。

(附) トチの実の調製に使用される語彙を記しておく。

アクジル 灰をとおした湯
 アワシバイ(エ) 最初のアクスキ用の灰汁をいう(上北山村西原)
 アワス トチにしみこんだアク汁をぬくこと。
 ウイバイ 2度目の灰のアク汁をいう。
 カナギバイ 堅い木の灰を言う。
 クイバイ 2度目の灰のアク汁をいう。
 クツバイ 最初の灰のアク汁をいう(十津川村)。
 コンキュウ 食糧がなくなり山の実など拾わ

ねばならぬこと。

サワス トチの実にしみこんだアク汁をぬくことをいう。アワスに同じ。
 タマタチユ にえたぎった湯で、灰のアク汁をつくる時に使う。
 トチオシ トチの外殻を割る用具
 トチガイ トチの入った粥で、吉野郡ではトチの実や粉を団子にして粥に入れている。
 トチシャギ トチオシに同じ(下北山村)
 トチダンゴ トチを粉にして湯でねったものでミソ汁や粥に入れる。
 トチハギ トチオシと同じ。
 トチモチ トチとモチ米とで搗いた餅。
 トチのハネ トチの葉のことで、赤ければトチが豊作であるという。
 ナマドチ 拾ったばかりのトチのこと。
 ハイマブシ 灰のアク汁のついたトチを洗うことをいう(十津川村上葛川)
 マドチ トチは2年に1度しかならないのでいう。
 マチドチ トチが1度に落ちず、一つ一つ落るのを待つ拾うことをいう。



トチオシの使用
 (上北山村西原)
 [トチの工程④]



灰のアクをつくる
 (下北山村下桑原)
 [トチの工程⑤]



トチに染みたアク汁を流す
 (下北山村上池原)
 [トチの工程⑥]



トチオシ (川上村)



トチオシ (下北山村下桑原)

フィールドノート

大和緋の文様と技法 ～割込法～ 芳井敬郎

(1)

緋とは、部分的に防染をした糸で織り上げたものをいう。先染であるため、織る段階で文様に少しのずれをつくるが、後染のプリント柄とちがいそれが独特の風合となっている。

緋は、近世以降広く庶民に好まれたため、自給され、また各地の物産となっているものも多い。

小稿でとり上げる大和緋も、近年まで奈良県の代表的な産物として、その名が全国に知られていたものである。

しかし、江戸後期よりさかんに製織された大和緋は、諸条件により昭和42、3年にすがたを消すことになる。

当時の大和緋の文様は、今日いささか残る木綿地によって知ることできるが、系統的にみる場合には割込帳や見本帳によるしか方法がない。

そこで今回は当館所蔵の割込帳をとり上げそのなかにみられる大和緋の文様について考察してみたい。蔵品は2冊であるが、その1冊は今回紹介する「井筒文」「十字文」を中心とした緋文のもので、もう1冊は「工夫(緋)」といわれる写實的緋文をあつかったものである。

これらの割込帳は、当時の織屋にかかわらず所蔵され、製織の備忘となっていたようである。その筆者は織屋の主人であり、内容は専門的用語を用い個人の手控の域を出ないものである。

今回のものは、昭和25～7年頃、橿原市膳夫町の故塩見伊策氏が記述されたものである。なお、当時のことについて同氏は冊子のなかで

「昭和二十五年二月上旬頃

(中 略)

想へバ、去ル昭和二十二年正月頃、愈々、大和緋復活、第一回ノ割當糸、純綿糸式十七梱が、有井ノ名倉様方へ着荷セシ時、寒イノニ、二月三日、雪ノ有ル中ヲ見ニ行キ、持ち帰りテ、早速ト紺緋製織ノ初仕事ニ掛リタリ。

爾来今日ニ至ルマデ満三ケ年間、身モ、

心モ緊張シテ業務ニ熱中セリ」

と記している。

この記述は、大和緋の歴史のなかで重要な事実を知らせるものである。戦前まで綿々とつづけていた大和緋の製造は終戦ののち、資材の不足から他の産業同様休業せざるを得なかったのである。そして引用文中に記すとおり、昭和22年より再開されるが、その間、奈良県下の織屋の有志が、統制物を扱っていた通産省に何度もはたらきかけるといふ苦労があったため、そのことを筆者はよろこびのなかで記したものと思う。今日当時糸の配給をうけた生存者の記憶も薄らいでいるため、貴重な資料といえよう。

そのころ筆者と仕事をしていた子息聖策氏の記憶によると、通産省へは、農村の働き着の需要にこたえるということで大和緋の再開を請願したため当初(昭和22年)は紺緋のみをつくったそうである。それから約3年後に大和緋の代名詞となっている「大和の白緋」をつくることのできたのである。

(2)

塩見家旧蔵の割込表には、紺緋と白緋との両方を扱っている。承知のとおり、紺緋とは藍(紺)色の地糸のなかに防染した緋糸を入れ白で緋文をつくったものである。白緋は、その反対に白地に紺の緋文がでたものである。

ここでは、深くふれないが、防染法として当時は、板締め法をとっていた。やはり、量産がきくということからこの手法がとられたのであろう。その作業に必要な染板を彫った彫師も健在であるため染めの方法について後日発表したいと考えている。

割込帳(以下帳面と略す)には、紺・白緋とも大小さまざまな緋文様が図示されている。そしてそれらは、「通」ごとに分類がなされている。通とは反物1巾に並ぶ文様の数のことをいう。帳面では、紺緋には、4通・6通・10通・14通・20通、白緋では4通・6通・8通・10通・12通・14通・16・20通・30通・40通・61通があげられている。

それらの文様はもちろん何段にもつらなるが、ほとんど引違いに文様を配置するになっている。ゆえに、反物全面に緋文がうまることがない。

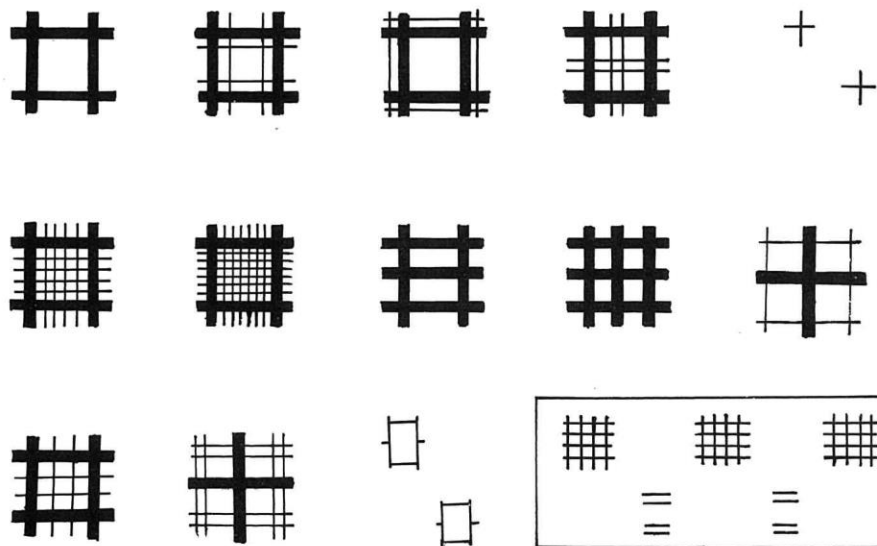
上述したとおり、帳では何通もの種類があるが、各通で少しずつちがった文様が例としてあげられている。その例は紺緋では4通が一番多く、次に6通・10通・20通・14通の順序となっている。白緋は8通が一番多く、次に20通・14通・10通・16通となり、40通・30通・12通は同数、そして6通・4通・61通となっている。このことから推測できることは、紺緋にくらべ、白緋はかなり、細かな文様をとりあつかっていたということである。それは、前に述べたように、大和緋の白緋は多くの需要があったため紺緋より力を入れてつくられたものと思われる。また、紺緋は野良着

として用いられたが、白緋は夏の浴衣として街行き着であったので紺緋より上物であるからともいえる。

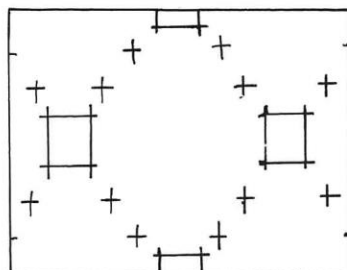
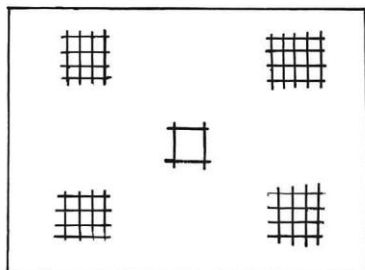
さて、文様自身についてみると、十字文と井筒文が基本となり、左右対称となっている。また、2つの図柄を組み合わせ、段ちがいのなったものもある。

井筒文はもちろん4本の線を組みあわせて井げたにしたものであるが、①それだけで文様としたもの、そのなかに②均等の間かくに幾本かの線を入れたもの、③また井げたの内外に1本ないは2本の線を寄せて入れたものがある。

十字文では、①それだけで文様としたものまた、②十字のまわりに幾本かの線を入れ井筒文の型になったものがある。



「緋文様」



ように、十字文、井筒文とも線の太さと線の太さと間かくのとり方で単純な文様に変化をつけたものと思われる。

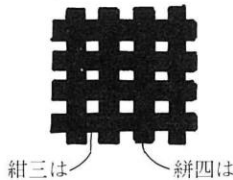
また、先ほどのべた段ちがいの文様は、帳面では紺紺は「四通り網」「四通りアミ変り柄」、白紺は「井筒に二の柄」をあげている。おそらく、これらは工夫紺とよばれていたものであるがこの帳面には余りとり上げていない。前述したとおり、当館蔵のもう1冊の帳面は工夫紺を中心に図示されているので、大和でもかなり多くの文様を織ったものと思われる。伝承によるとこの帳面を書いた塩見家では余り工夫紺をつくらなかったそうである。

帳面には文様の他に整経に際してに必要な糸の本数を記している。

そのなかの1例を下に引用する。

「四通り 十六羽モヨ (注：紺紺)

紺一本 百二十八羽



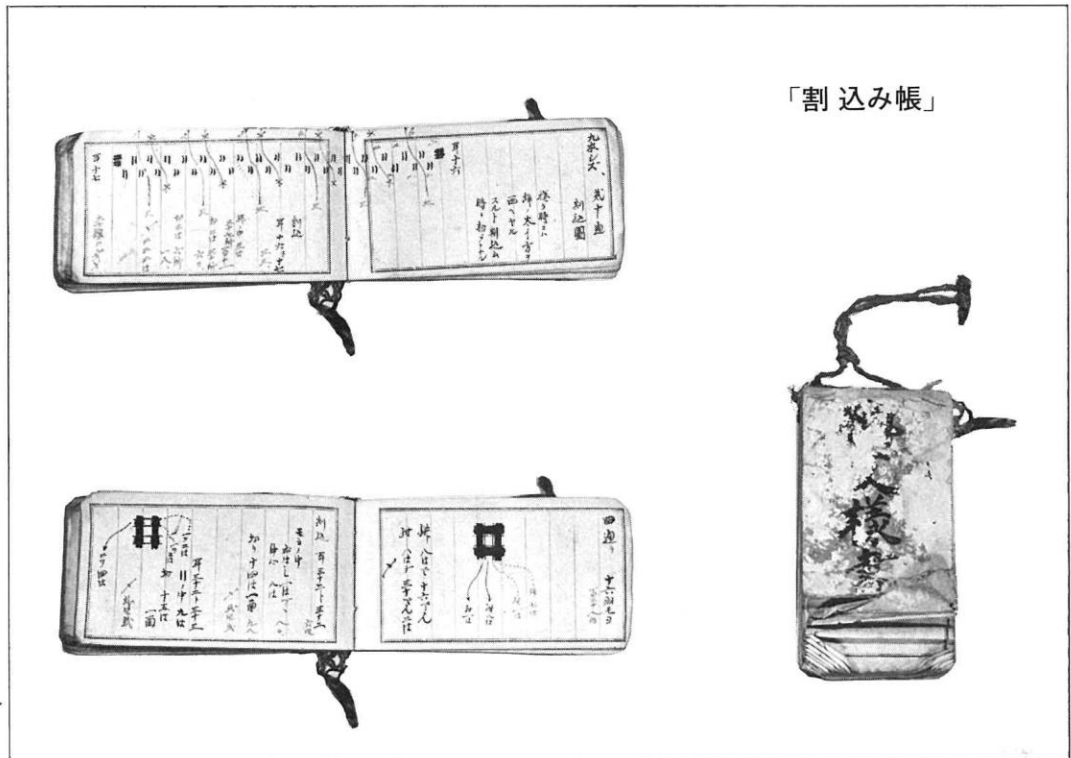
紺 八はデ 十六べん
紺 〃 三十へん二羽
〃 四十六度二は
割込 耳 三十二ト三十三
中 三はヅ、八所 七十二は
切り十五は 七所 五〇五は
紺一モヨ 二十四は 』

前述したとおり「四通り」とは1巾1段に4つの文様がでているものをいう。その文様は図でわかるとおり「紺四は」「紺三は」となっている。(羽とは箴目のことで大和紺では1羽に2本ずつ入れる)。紺は紺糸に対してのいい方で、藍色の地糸のことである。紺糸は、文様のたての1辺が4羽であるため、4辺分で16羽となる。ゆえに「十六羽モヨ(文様)」という表現をしている。

「紺 八はデ 十六べん」と「紺 八はデ 三十へん二は」を合計すると、 $8 \times 16 + 8 \times 30 + 2 = 370$ (羽)となる。これは、大和を中心につかわれる「度」(8羽のこと)であらわすと、「四十六度二羽」になるわけである。この370羽(ようにするに740本)は1反分の経糸の総数を表現している。

そのことは、帳面の1丁の表に記している。そこでは

「割込み帳」



「 紺 紺 規 格

経糸 十六手 七四〇本

正、四十六度二羽

緯糸 十六手 寸間打込

六十八本

正藍染

巾 九寸二分以上

丈 三丈以上

一反百九十匁位ノ本綿出来ル。」

と記されている。ようするに紺紺の場合には経糸とも緯糸とも16番手の本綿糸を使用し、経糸は760本使用する。また、経糸を織機にかけたのち、梭で打ち込む緯糸は布1寸間に68本必要と記されている。

上記の引用文からは、1反分の寸法と重さもわかる。反物の巾は9寸2分以上、丈は、3丈以上、重目は190匁であった。この数字は織屋にとっては重要なものであった。それは品質確保等の為設立された「大和紺共同組合」で数字以下の反物は除かれ1等商品とならないためである。また染も、正藍でなすことが決められていた。

ゆえに他の文様についての書き入れでもほとんど46度2羽となっており、異なる度数でもそれより少ないものはない。

ようするに前述したことよりあきらかなように、文様をつくる紺糸は1文様で16羽であり、その紺文は、1反分に段ちがいに8ヶ所できるため、 $16 \times 8 = 128$ (羽) が経糸総数のうちの紺糸の数である。ゆえにそれを除いた糸は370羽(46度2羽) $- 128$ 羽 $= 242$ 羽で39度となる。

その39度(242羽)は地糸(紺糸)分の数であるが、それは、引用文後尾の「割込」以下の部分とかかわってくる。

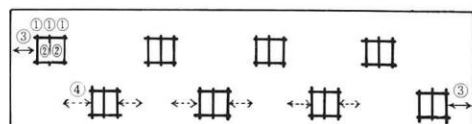
それをまとめると、

$$\left. \begin{array}{l} \text{割込 耳 } 32+33=65 \\ \text{中 } 3 \times 3 \times 8=72 \\ \text{切り } 15 \times 7=105 \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{計} \\ 242 \text{羽} \end{array}$$

となる。ここでいう「耳」とは織耳(布の端)の耳糸のことで一反にかならず2ヶ所あり、ここでは32羽と33羽とっている。また「中」とは、文様内の地糸分で、引用文のなかの文様には、3羽の糸が3ヶ所入っている。ゆえに1反分にならぶ中は $3 \times 3 \times 8 = 72$ (羽)となる。「切り」とは文様間のことで1ヶ所

分は、15羽であるため、1反で7ヶ所あることから、 $15 \times 7 = 105$ (羽)となる。ゆえに地糸の合計は、242羽である。

この計算方法を図にすると以下のようになる。



① 紺糸分

②(中)+③(耳)+④(切り)=地糸分

以上のことからあきらかなように、大和紺では整経の段階で、地糸と紺糸を別々にして作業をおこなうのである。これは、以前に発表した自給本綿の場合の整経と異なる。^(注)ここでは、地糸と紺糸をともに整経している。大和紺では量産化のためこのような整経法が導入されたと思われる。また、使用具も異なっている。大和紺では当館所蔵品から推測して大ワクをセットした経棒器が利用されたと思われる。また、自給本綿の場合には整経台が使用されている。

しかし、大和紺の整経法では、整経ののち、地糸のなかへ紺糸を入れる必要がある。それを「割込み」という。

(3)

割込み帳によって文様の種類と図柄、その通数、また、割込みについて詳述した。

そこで、わかることは、白紺と紺紺の2つがあり、その文様は単純な十文字と井筒文を中心に、幾種類ものちがったものをつくり上げているということである。その文様が変化あるものにみえるということは、文様をつくり上げている糸の本数と、文様内外の地糸の本数との関係によるといえよう。

また、そこに書き添えられた糸数は、「整経」と「割込み」という作業のなかで必要となってくる。そこで文様とともに、備忘のため糸数はぜひ記入しなければならないということである。

(注) 拙稿「奈良に生きる本綿紺」(季刊『染織と生活』第6号 昭和48年8月)

博物館事業報告

(昭和52年)
1月～12月

山下 勝

昭和49年11月の開館以来早満3年余が経過して、当館の活動もようやく軌道に乗ってきたかのように思われる。それは、いうまでもなく、多くの県民の方々のあたたかいご支援と各関係機関のご協力、そして職員一同の努力のたまものである。

つぎに過去一年を振り返って見て、その事業成果を報告する。

入館の数は昨年を大きく上廻り、とりわけ観光バスでの婦人会、老人クラブ、その他の団体の参観者を多く迎えたことは今年の特徴といえよう。また、県外の来館者も増えつつある。特に参観者の約半数は、小・中学校の児童、生徒であって、校外学習活動の一環として当博物館を利用する学校が多くなった。

館内の展示については、常設展示はもちろん、秋の特別展の他一部を展示替えしてテーマ展、コーナー展などを開催し、ますます好評を得ているところである。

また、教育活動としては、民俗講座と題して講演会を年4回、夏休みには『親と子の民俗教室』を開き、かなりの成果をあげた。そして県内の各地では、各種団体の協力をえて移動展示を開催し、県民に郷土の伝統、風俗、習慣などに対する理解と認識を深めていた。

そのほか、民俗資料の収集、整理については、人手不足をかこつことが多く、大巾な予算措置を願うこと切である。また、研究調査については、今年は研究紀要を上梓することができた。今回は、学芸員全員が執筆したが、今後も全員執筆を毎年の原則としてゆきたい。

一方公園の造成工事も年次計画的に逐次進捗し、今年は一層民俗公園らしくなったといえよう。それと云うのも新しく国中集落に三棟目の復原工事も着々と進んでいるからであり、これは3月頃に完成の予定である。また、公園整備も民家敷地を中心に宇陀、東山中の各民家集落地の工事に取り掛かり、ようやく、全体整備面積の60%以上までにこぎつけた。

なお各事業が計画どおり行なわれたことは、ひとえに県民の皆様、関係各位の御指導、御協力のたまものであり、これらの御好意に報いるため、より一層県民の皆様にも親しまれる博物館、公園の完成を目指す所存である。

◀博物館事業▶

～展 示～

昭和51年11月27日～昭和52年3月27日

常設展 調度～むかしのインテリア～

昭和52年3月31日～9月27日

テーマ展 運 搬～物と人の移動～

5月5日～11月30日

コーナー展 藁の利用(Ⅲ)

10月1日～11月30日

特別展 念仏信仰～供養と祈願～

12月4日～昭和53年3月27日

テーマ展 食制具～儀礼とうつつわ～

12月4日～昭和53年5月31日

コーナー展 脱穀～センバコキ～

～移動展～

3/5～3/24 南都銀行本店(灯火)

3/24～3/26 大淀町中央公民館

(くらしの中の衣食住～晴と褰～)

3/21～3/26 南都銀行本店(特展紹介)

3/24～3/26 南都銀行郡山支店(収穫1)

3/26～3/28 同 上 (収穫2)

民俗資料収集状況表

分 類	46. 10 ～51. 12	52. 1 ～52. 12	分 類	46. 10 ～51. 12	52. 1 ～52. 12
衣	846	1	社 会 生 活	698	0
食	1183	20	信 仰	494	8
住	1001	33	民 俗 知 識	447	0
生産・生業	2827	33	民 俗 芸 能	93	5
通信・交通・運輸	303	5	人 の 一 生	114	16
交 易	532	11	年 中 行 事	36	2
合 計				8708	134

～体験学習講座～

1. 23 ナベツカミづくり
2. 27 ワラジづくり
3. 27 タワラ編み
4. 24 一刀彫
5. 22 番茶づくり
6. 26 杓子づくり
7. 24 石テッポウづくり
8. 28 カゴづくりⅢ
9. 25 状差しづくり

10. 23 カゴづくりⅣ
11. 27 灯芯引き
12. 25 シメナワづくり

～民俗講座～

4. 17 山の信仰について
龍谷大学教授 池田源太氏
6. 12 漁撈具について
平安博物館助教授 渡辺 誠氏
8. 14 江戸時代の旅行
龍谷大学教授 宗政五十緒氏
10. 9 近世大和の農村
奈良教育大学教授 木村博一氏

～民家講座～

5. 8 民家室内の細部
奈良国立文化財研究所 宮沢智士氏
11. 6 民家の外観
当館建造物技師 松田敏行氏

～特別講演～

10. 30 念仏信仰と芸能
大谷大学教授 五来 重氏

～親と子の民俗教室～

7. 23～24 「むかしのたべもの」他

◀広報活動▶

～テレビ～

4. 24 体験学習講座「一刀彫」風景紹介
(関西テレビ)
6. 20 奥さまリビング、リビング専科にて
体験学習講座「杓子づくり」紹介
(関西テレビ)
8. 26 体験学習講座「カゴづくりⅢ」紹介
(関西テレビ)
9. 「大和路」にて奈良県立民俗博物館
紹介 (毎日テレビ)
10. 4 文化シリーズ、生活の中の日本史



体験学習講座カゴづくり風景

「道具の知恵」にて奈良県立民俗博
物館紹介 (NHK教育テレビ)

～新聞～

- 2月 体験学習講座(ワラジづくり) 紹介
(毎日新聞)
2月 白井家住宅紹介 (朝日新聞)
2月 〃 (サンケイ新聞)
2月 〃 (奈良新聞)
3月 吉川家住宅紹介 (朝日新聞)
3月 〃 (毎日新聞)
4月 「物と人の移動」展紹介 (朝日新聞)
4月 〃 (読売新聞)
4月 民俗公園紹介 (毎日新聞)
4月 民家講座の新設紹介 (朝日新聞)
5月 オートスライド製作紹介 (朝日新聞)
6月 研究紀要刊行の紹介(朝日・読売新聞)
6月 鹿沼家の移築予定紹介(サンケイ新聞)
6月 体験学習講座(杓子づくり) 紹介
(毎日新聞)
7月 親と子の民俗教室案内(朝日新聞・県
民だより 毎日新聞、読売新聞)
9月 特別テーマ展「念仏信仰」紹介
(朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、サ
ンケイ新聞)

10月～シリーズやまとの民俗(双盤念仏ほか)
(朝日新聞)

12月 テーマ展「儀礼とうつわ」紹介
(朝日新聞、読売新聞)

～印刷物～

研究紀要第1号
博物館だよりVol.ⅢNo.4～Vol.ⅣNo.3(4回)
念仏信仰～供養と祈願～(図録)
生 業～大和の民俗展シリーズ～(図録)
絵でみる大和のくらし・改訂版(図録)

◀日記抄▶

1. 21 堺市長、助役、議会議員視察
2. 3 浜松市教育委員視察
2. 15 加古川市教育委員視察
3. 9 国学院大学、博物館実習
3. 19 民俗専門委員会
3. 24 民家専門委員会
3. 26 大和郡山市会議員視察
3. 30 県会議員(総務委員会)視察
4. 1 人事移動 次長山下勝、技師藤堂利
明転入 次長広沢修、技師岸本哲浩

転出

4. 26 近畿各市教育長会視察
5. 14 山添村教育委員会視察
5. 26 千葉県民間博物館協議会視察
6. 3 県下市町村社会教育主事会見学
6. 16 文化庁無形文化民俗文化課長視察
6. 23 花園大学、博物館実習
7. 1 人事移動 技師井上廣和転入、技師川瀬浩転出
7. 27 立教大学、博物館実習
8. 23 奈良市教育委員視察
9. 8 橿原市教育委員会見学
9. 10 民家専門部会
10. 4 西宮市教育委員会視察
10. 8 龍谷大学、博物館実習
10. 27 大阪府青少年野外活動振興会見学
11. 6 多摩市教育委員会視察
11. 12 天理市教育委員会、ふるさと会見学

◀管理、運営▶

～職員～

学芸主事芳井敬郎

館長 川内一郎 ♪ 松崎憲三
次長 山下 勝 ♪ 大宮守人
総務係長 松田敏信 ♪ 浦西 勉
主事 和田泰子 建造物係長松田敏行
♪ 富畑るみ 技師今西良男
♪ 吉岡 豊 施設係長藤堂利明
嘱託 岡崎梅吉 技師井上廣和
学芸係長 奥野義雄 ♪ 倉窪 孝

～民俗専門委員会～

平山敏治郎（成城大学教授）堀井甚一郎（奈良教育大学名誉教授）林 宏（奈良教育大学教授）岸田定雄（東大寺学園教諭）

～民家専門委員会～

工藤圭章（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長）宮沢智士（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査室長）青山堅信（大阪工業大学教授）（敬称略）
尚、鈴木嘉吉氏は文化庁建造物課へ転任されました。

～昭和52年度予算～

（単位千円）

民俗博物館運営費 111,352
職員費 53,445 管理費 38,275
研究調査費 2,313 収集費 412
広報費 2,899 運営費 7,008
その他 7,000

公園整備事業費 180,430

◀公園等整備事業▶

～民家～

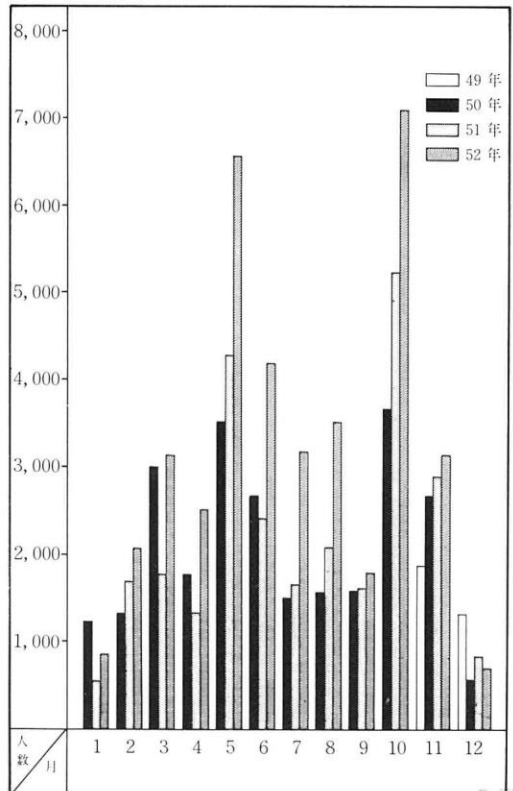
旧鹿沼家住宅S52. 6解体……旧萩原家住宅（県指定）旧赤土家離座敷S53. 3復原完了予定

～公園整備～

	51年度まで	52年度完成予定
公園完成面積	8.6ha	0.8ha
園路延長	1,516m	231m
便 所	1棟	
休憩所		1棟
パーゴラ		1基
池	1ヶ所 530㎡	
植 栽		
高 木	910本	
低 木	22,200本	
芝 生	2,980㎡	

年度別利用者数内訳

昭和49年11月～昭和52年12月末



(昭和52年)
(1月~12月)

昭和52年1月より12月に至る間、26名の方々から134点に及ぶ民俗資料をご寄贈いただきました。ご芳名を記し、厚く御礼申し上げます。

分類番号	調査番号	民 俗 資 料 名	数 量	採 集 地	寄 贈 者 氏 名	備 考
■ 衣・食・住 ■						
【A】服 飾						
A-A	938	ゾ ウ リ	1	大和高田市南本町	安川新也	
【B】食 事						
B-B	908	桶 (米入用)	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎	
	909	ク	1	ク	ク	
	910	米 入	1	ク	ク	
	880	ハ シ ギ リ	1	下市町阿智賀	南 敬 二	
B-C	927	釜 輪	1	高 取 町	森 下 祐 一	
	926	釜	1	ク	ク	
	912	ク	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎	
	913	カ シ ス	1	ク	ク	
	903	ク	1	下市町阿智賀	小 出 綾 子	
	914	セ イ ロ	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎	
B-E	892	漬 物 桶	1	大 淀 町 下 瀬	田 原 善 次	
B-F	874	牌 油 し ば り 道 具	1	下市町阿智賀	南 敬 二	
B-I	939	椀 一 式	1	大和高田市南本町	安川新也	
	954	ボ シ	1	ク	ク	
	955	ク	1	ク	ク	
【C】住 居						
C-D	934	状 さ し	9	大和郡山市柳町	森 本 清 春	
	944	机	1	大和高田市南本町	安川新也	
	920	フ ト シ ダ シ ス	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎	
	899	ク	1	下市町阿智賀	小 出 綾 子	
C-D	900	帳 タ シ ス	1	ク	ク	
	901	コ ソ デ タ シ ス	1	ク	ク	
	902	ク	1	ク	ク	
	940	タ シ ス	1	大和高田市南本町	安川新也	
	941	ク	1	ク	ク	
	942	ク	1	ク	ク	
	943	手 も と タ シ ス	1	ク	ク	
	945	手 ヒ バ シ チ	1	ク	ク	
	946	火 消 ツ ボ	1	ク	ク	
	891	レ シ タ シ 製 造 具	1	大 淀 町 下 瀬	田 原 善 次	
	896	コ ラ タ シ ツ	1	大和郡山市今国府	森 川 新 勇	
	947	コ ラ タ シ ツ	2	大和高田市南本町	安 川 新 也	
	919	手 提 行 灯	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎	
	918	ガ シ ド ウ	1	ク	ク	
	917	弓 張 提 灯	2	ク	ク	
	916	ク	1	ク	ク	
	948	ボ テ コ	1	大和高田市南本町	安川新也	
C-E	872	夜 着 (掛布団)	1	大 塔 村 西 安 塔	安 莊 司 新 安 雄	
	922	古 文 書	2	大和高田市永和町	鹿沼治三郎	

■ 生産・生業 ■

【D】農 耕																
D-A	883	マ		ン		ガ	1	大	淀	町	下	渕	田	原	善	次
	883	カ	マ	マ	ン	ガ	1									
	904	備		中		グ	ワ	1	下	市	町	阿	智	賀	小	出
	882	カ	ラ		ス	キ	1	大	淀	町	下	渕	小	田	原	綾
D-B	923	尾	張		グ	ワ	1	奈	良	市	西	大	寺	小	坊	町
								鯨	田	喜	久	治				

	924	ク	ワ	1	奈良市西大寺小坊町	鮫田喜久治
	885	テ	ワ	3	大淀町下瀬	田原善次
	886	ミズグルマ (除草機)		1	〃	〃
	925	麦の土入器		1	奈良市西大寺小坊町	鮫田喜久治
D-C	887	セシバコキ		2	大淀町下瀬	田原善次
	877	セシバ (麦用)		1	下市町阿智賀	南敬二
	888	カラサオ		1	大淀町下瀬	田原善次
	889	クライヌ		1	〃	〃
	915	フル	イ	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎
	878	カラウスのキネ		1	下市町阿智賀	南敬二
	935	ヘ	ラ	4	大和郡山市柳町	森本清春
[E] 山		樵				
E-E	905	熊野川流送写真	16		奈良市学園朝日町	大畠秋雄
[F] 漁		撈				
F-C	928	アユシングリ	1		大淀町下瀬新町	鍵谷一隆
F-D	931	アミスギバリ	1式		大和郡山市柳町	森本清春
[H] 養		蚕				
H-A	890	養蚕用暖房具	1		大淀町下瀬	田原善次
H-B	876	ケバトリ	1		下市町阿智賀	南敬二
[I] 畜産						
I-A	881	ウシのクラ	1		大淀町下瀬	田原善次
[K] 手工・製造						
K-B	928	竹ノコン	1		大淀町下瀬新町	鍵谷一隆
	936	手動ミシン	1		大和郡山市西田中	水原一政
[L] 諸職						
L-B	937	臼掘用器材一式	3		御所市東佐味	北浦宗一
	906	フイゴ	1		川上村大滝	松本寿吉

■ [M] 交通・運輸・通信 ■

M-A	898	ヤエ	ン	1	十津川村高津	井上賢三
M-B	930	弁当フゴ (腰提)		1	大和郡山市柳	森本清
	895	フ	ゴ	1	大和郡山市今国府	森南敬二
	879	トウフ入	れ	1	下市町阿智賀	南敬二
M-C	897	田	舟	1	月ヶ瀬村石打	稲葉長輝

■ [N] 交 易 ■

N-B	907	銭	箱	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎
	949	銅貨	入	1	大和高田市南本町	安川新也
N-C	911	トマ	ス	1	大和高田市永和町	鹿沼治三郎
	875	一斗	桝	1	下市町阿智賀	南敬二
	950	銭	桝	2	大和高田市南本町	安川新也
	951	ソ	口	1	〃	〃
	894	ハ	カ	3	奈良市南京終	岡崎米吉
	960	印	肉	入	〃	岡崎梅吉

■ [P] 信 仰

P-C	893	報恩講御供物用具	1		大淀町下瀬	田原善次
	962	庚申塔	3		桜井市赤尾	庚申講代表 佃宗次郎
	961	庚申御供棚	1		大宇陀町大熊	庚申講代表 隅田隆蔵
P-G	956	六斎講衣裳	1式		御所市東佐味	田中宗治
	957	〃	1式		〃	山本一人
	958	〃	1式		〃	落合信雄

■ [R] 民俗芸能・娯楽・遊戯 ■

R-G	959	軍	配	1	奈良市南京終	岡崎梅吉
R-H	932	ブンブンゴマ	2		大和郡山市柳町	森本清
	933	ガラガラ	2		〃	〃

■ [S] 人の一生 ■

S-F	952	嫁入カゴ	1		大和高田市南本町	安川新也
S-I	873	葬式用輿	1		下市町仔邑高原	高原寺・高原区
	953	着物 (法事用)	14		大和高田市南本町	安川新也

■ [T] 年中行事 ■

T-L	871	藁製牛・馬	2		大淀町今木	中野源一
-----	-----	-------	---	--	-------	------

寄贈図書資料目録(二)

調査報告書

善賢堂の民俗	東京女子大学民俗調査団
甲州秋山の民俗	東京女子大学民俗調査団
西川の民俗	東洋大学民俗研究会
小平の民俗	東洋大学民俗研究会
粕尾の民俗	東洋大学民俗研究会
土佐本山町の民俗	大谷大学民俗学研究会
山梨県北都留郡小菅村長作	東京学芸大学民俗学研究会
茨城県大和村本木茂賀坪	東京学芸大学民俗学研究会
越後のむらと伊豆のむら	東京学芸大学民俗学研究会
三宅村石見探訪記録	奈良教育大学民俗研究会
川上村・平群町地区探訪	奈良教育大学民俗研究会
大塔村・田原・狭川地区探訪	奈良教育大学民俗研究会
柳田村五十里地区民俗調査	覚書同志社大学民俗研究会
和泉横山谷の民俗Ⅰ(第26輯)	大阪文化財センター
和泉横山谷の民俗Ⅱ(第27輯)	大阪文化財センター
河内滝畑の民俗(24輯)	大阪文化財センター
文化財写真集(1)	大阪文化財センター
和泉の古代生活	大阪文化財センター
大阪府の民俗資料	大阪府教育委員会
大阪府の民家	大阪府教育委員会
摂津深江の菅笠の研究	大阪府教育委員会
東大阪市の民家	東大阪市教育局委員会
馬場川遺跡(Ⅳ)	東大阪市教育局委員会
若江寺跡・若江城跡	東大阪市教育局委員会
河内木綿	東大阪市教育局委員会
東大阪市民文化財調査報告書	東大阪市教育局委員会
大慈山	元興寺仏教民俗資料研究所
西大寺民俗資料緊急調査	元興寺仏教民俗資料研究所
当麻寺民俗資料緊急調査	元興寺仏教民俗資料研究所
壬生寺民俗資料緊急調査	元興寺仏教民俗資料研究所

〈寄贈機関名〉

当麻寺来迎会民俗資料緊急調査	元興寺仏教民俗資料研究所
法隆寺舍利殿発見仏教民俗資料調査概要	同上
石川県の民家	石川県教育委員会
岳の幟の祭礼調査報告書	上田市教育委員会
大野の送神祭	埼玉県教育委員会
民俗資料緊急調査報告書	和歌山県教育委員会
一棒山ダム水没地域一	
月山山麓月山沢(他)の民俗	山形県教育委員会
沼津内海の民俗	沼津市教育委員会
伊賀西部山村習俗調査報告書	三重県教育委員会
伊勢型紙を中心とした民俗報告	三重県教育委員会
郷土の鉄砲鍛冶	三重県教育委員会
三重志摩地方の民俗調査	三重県立博物館
伊賀町の民俗	伊賀町文化財委員会
京都の漬物	京都府立総合資料館
春日田楽細男調査報告	春日顕彰会
春日大社舞楽装束類調査報告	春日顕彰会
橿原市の文化財	橿原市教育委員会
高山～町並調査報告～	奈良国立文化財研究所
奈良県五條の町並	五条市教育委員会
蔓橋の製作工程	文化庁
神奈川県民俗調査報告(7)	神奈川県立博物館
離島調査報告書(研究資料6集)	宮崎県総合博物館
離島調査報告書(研究資料7集)	宮崎県総合博物館
東毛の漁具と漁法	群馬県立博物館
群馬の絵馬	群馬県立博物館
野田の民俗調査	野田市教育委員会
山崎貝塚	野田市教育委員会
海上町・舩倉島	石川県立郷土資料館
細川紙手漉き和紙コレクション	埼玉県教育委員会
埋蔵文化財発掘調査報告	松山市教育委員会
文京遺跡	松山市教育委員会
古照遺跡(Ⅱ)	松山市教育委員会
岩子山古墳	松山市教育委員会
神戸の民俗芸能(灘、葺合、生田編)	神戸市教育委員会
神戸の史跡	神戸市教育委員会

★★★★ おしらせ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

3月28日まで

テーマ展 儀礼とうつわ～食制具～

4月1日～9月末日まで

テーマ展 農具(仮題)

3月28日まで

コーナー展 脱穀～センバコキ～

1日22日 体験学習講座〈風つくり〉

2月26日 体験学習講座

〈カンジョウナワつくり〉

3月26日 体験学習講座〈フゴつくり〉

〈訂正〉先号にて誤植がありましたので、お詫びし訂正させていただきます。
P4 左段12行目『昔風の[・]当世風[・]』⇒と
P4 右段1行目 叩いて⇒叩いたり

■編集後記■ 博物館の向いに団地があって様々な家が所狭しと立ち並んでおり、今でもしばしば棟上げ式が見うけられる。その施工から完成に至る期間の短さには驚かされるが、一方民家の移築復原には煩わしい手続きが伴って一朝一夕にはゆかない。この完成期間の相違は、家屋の構造上の単純さと複雑さ、作業の明快さと煩雑さとの差違の反映でもあるが、施主の完成を待ちわびる心境には違いがあるだろうか。(尾瀬河骨)